声なき感染症を知る ◆22◆

再流行している梅毒

若い女性中心に急増

リスクと予防知って

県感染症情報センター

「梅毒が若い女性を中心に広がっている」とする報告が、国立感染症研究所の「感染症発生動向調査2015年第4号」で取り上げられました。今回は、性感染症の一つ「梅毒」の現状についての話をします。

▽歴史

明白な根拠があるわけではありませんが、梅毒は1500年ごろ、コロンブス（一行の乗組員の一人）が、新大陸（アメリカ大陸）から持ち帰り、世界的に広めたというのが定説です。

わが国では、杉田玄白の「形影夜話」（1802年）や松本良順の「養生訓」（1864年）などの書のなかで、深刻な患者状況についての記載があり、江戸中期から末期には国内で大いに流行していたようです。

▽原因と症状

原因となる病原体は梅毒トレポネーマという細菌に近い微生物で、主に性行為により感染します。この病原体は培養するのが非常に難しく、そのため病原体の機構は未だ十分に解明されていないのが事実です。治療にはペニシリンなどの抗生物質が有効です。

感染の初期は、陰部のしこりや潰瘍（かいよう）が特徴的で、軽い症状のままで一旦（いったん）は治りますが、病原体は体内にとどまっており、しばらくして発熱や発疹（ほっしん）などの多彩な症状が現れてきます。慢性化すると、全身の合併症で神経が侵されるなど深刻な状況となります。

また、梅毒にかかった妊婦から胎盤を通じて胎児が感染する「先天性梅毒」は、死産や早産のほか、脳や精神の発達障害が現れる恐れがあると言われています。

▽国内外の発生状況

世界的規模での伝播（でんぱ）は大航海時代以降ですが、1940年代にはペニシリンの発見から患者は激減し、過去の感染症として扱われるようになった歴史があります。

ところが、2000年ごろから世界的に再流行が確認されるようになりました。WHO（世界保健機関）によれば、1年間に北米で約10万人、ヨーロッパと中央アジアで約24万人、さらに北アフリカ、中東、東南アジアなどでも相次いで新規の患者が発生しているとのなっています。

特に女性患者が、年間124人だった2010年と比べて4倍以上に急増しており、特に20～24歳が177人と最多で、先天性梅毒患者も十数人が確認されるなど、深刻な状況が浮かび上がっています。

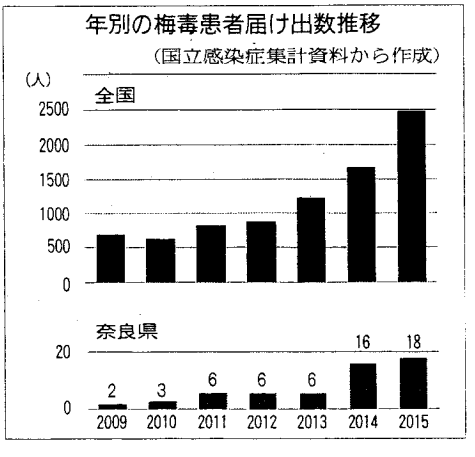
奈良県でもグラフに示したように、2014年が16人、2015年が18人といずれも調査開始以降、最多を更新しています。

▽治療と予防

自覚症状がある場合は、パートナーの感染リスクも高いので、2人同時の検査や治療が驚くべき状況が示されました。

国立感染症研究所によるわが国の状況は、2014年12月29日から2015年10月25日の間に、医師が梅毒と診断し届けた総数は2037人（男性1463人、女性574人）で、集計を取り出して以降、最悪の報告数と必要です。現在では、治療を始めさえすれば、重症化することは稀（まれ）です。

予防には、この病気が性感染症であることから、まずは不特定多数との性交渉は、感染リスクを高めるということを知識として持つことが重要です。

（県感染症情報センター）

＝第2木曜日掲載＝